

第 28 期目録委員会記録 No.16

第 16 回委員会

日時：2002 年 11 月 30 日（土）14 時～17 時

場所：日本図書館協会 5 階会議室

出席：永田委員長，木村，白石，原井，古川，増井，室橋，横山，和中

欠席：乙骨，堀井

<事務局>磯部

[配付資料]

1. [第 13 章改訂案]13-0-1130 (37 ページ-A4, 原井委員作成)
2. 13-0 別紙-1130 (1 ページ A4, 原井委員作成)
3. ISBD(CR)draft 01.1 AACR2 12.0A1. (4 ページ A4, 原井委員作成)
4. AACR2 2002R における第 12 章とその関連規定の改訂 (3 ページ A4, 古川委員作成)
5. 目録の新しい地平を求めて -国内外の動向に関する展望と私見- (8 ページ B5, 古川委員執筆)
6. 記述対象と書誌記述 -最近における国際的な目録研究および規則改訂動向を踏まえて- 吉田暁史, 田窪直規, 堀池博巳 (図書館界 Vol.54 No.2 p110-115) (3 枚 B4, 古川委員コピー)
7. NCR 課題管理票 (5 ページ A4, 横山委員作成)
8. 和漢古書 (3 ページ- A4, 増井委員作成)
9. 和漢古書に関する取扱い及び解説 (最終案)(国立情報学研究所)(5 ページ A4, 増井委員)
10. 日本語・中国語・朝鮮語等漢字圏の文字による古書の扱い(1 ページ A4, 増井委員作成)
11. 転記不可の文字について(2 ページ- A4, 増井委員作成)
12. NCR 各章の意義・目的・記録方法比較 (15 ページ (1/30-15/30) - A4, 15 ページ (30/16-30/30)- A4, 白石委員作成)

[連絡事項]

1. NCR1987 年版改訂 2 版 第 2 刷

前回までに検討した修正事項を入れた第 2 刷が完成した。(2002 年 11 月 30 日付)

2. NII の和漢古書に関する取扱い

昨日、NII 図書館情報委員会第 2 回で和漢古書の取扱いに関する小委員会で作成した案(資料 9) が了承された。

・目録委員会でも、NCR とどのくらい違うかみて、こちらでフォローアップする必要がある。

・NII では、メタデータのマニュアルもできたようだ。

3. 国会図書館（NDL）の書誌調整連絡会議

25日（月）にNDLで「書誌調整連絡会議」が開催された。内容は、永田委員長の「メタデータをめぐる問題」、杉本氏のDC会議（フィレンツェ）報告、NDLからアーカイブ事業WARPとナビゲーション・サービスDnaviの報告、NIIからメタデータのデータベース共同構築の試み、その他に、岡山県立、秋田県立、農林水産省図書館、公文書館アジア歴史資料センターからの報告があった。NIIの事業は、大学の情報発信の面をアピールするものとなり、サブジェクト・ゲートウェイの要素は後退したようだ。公文書館の事業はISADとDCをあわせて処理した注目に値するものだ。

[検討事項]

1. 課題管理票について

作成した横山委員が説明した。前々回に古川委員が第27期9回以降リストアップした課題について議事録を見ながら入れ込んでいった。手元の議事録で26期10回まで溯って見たが、それほど課題はなかったので、27期からスタートしている。フォーマットについては、更新日を追加するということだけ以前の委員会で検討されたが、実際に作成してみると、課題と概要の切り分けが難しい上、無駄でもあるので、この2つを一本化して、検討状況がきちんと書き込めるようにしたい。なお、前回と前々回に出た課題は入れていないし、その間に問題解決したものはまだ閉じていない。

- ・3ヵ月に1度くらいはこの課題管理票について検討する時間を設けた方がいい。
- ・半分以上は13章関係で、これらは13章の検討が進めば解決される。その後は、それ以外の全体にわたるものや1章に関するものを検討することになる。

2. NCR 各章の意義・目的・記録方法の比較について

作成した白石委員が説明した。前回、途中まで作成してあったNCR各章の意義、目的、記録の方法の条項を比較する表を完成した（資料12）。前半と後半でセットになっているので横にならべると同一エリアの条項が第1章から第13章まで一度に比較できるようになっている。

3. 第13章について

原井委員が資料に沿って今回の改訂箇所について説明した後、検討を行った。

(1) 13.0 について

13.0 通則については、AACR2を見て検討することにしていて、AACR2が刊行されたので、

AACR2 12.0A1.と ISBD(CR)draft 01.1 に日本語訳を付けて比較しやすくした(資料3)。この新しい AACR2 を参考に、通則の部分全体を新たに書き直した(資料2)。

AACR2 と ISBD で、この章で扱う範囲は一致している。通則の構成も、逐次刊行物と更新資料をまずあげて、それに加えて、finite な資料のうち、終期を予定しているものや複製資料も扱うとしている。NCR でも通則全体の構成を AACR2 にほぼあわせ、扱う範囲も同様とした。

- ・ AACR2 では monographs 以外はすべて 12 章で扱う。マルチパートは外すことになった。
- ・ multipart - 多冊資料 continuing resource - 時間的に継続する資料
finite resources - 終期のある資料 integrating resource - 更新される資料
monographs - 終期があって更新されない資料
- ・ 従来は monographs と serials の 2 つに区分してきたが、混乱している。finite か continuing かに分けると、integrating resource が両方に分かれてしまう。integrating とそうでないものに分けると、integrating が 1 つにまとまって、integrating ではないものに monographs と serials が入る。
- ・ 2 つの区分原理があるので、2 段階で区分すると 4 種になってしまうが、実際は monographs、serials、integrating resource の 3 種類だと考えた方がわかりやすい。そのうちで、ここでは monographs 以外を扱い、さらに monographs であっても、serial like なものも扱うとしている。
- ・ serial like はマルチパートアイテムの一種。
- ・ 継続資料は、逐次刊行物と終期を予定しない更新資料である。類似するものとして serial like なども継続資料と同じ扱いをする、という言い方をする。
- ・ 「2 章から 12 章」の箇所は序数なので「第 2 章から第 12 章」とすべき。他の条項でも「9 章」とあるのは「第 9 章」とすべき。

(2) 注記について

「必要に応じて注記する」を「注記してもよい」に直した。その場合、例えば、13.1.4.3 「更新資料では、記述を改め、変化前のタイトル関連情報は必要に応じて注記する」では、単に末尾だけ「注記してもよい」とすると、「記述を改め」のほうにも「してもよい」がかかってしまい、文脈が妙なことになるので、「...記述を改める。」と文を切った。この部分以外にも同じようなところがあるので、同様に文章を書き換えた。その他にも文脈から考えて前後の言葉を修正している箇所がある。

13.7.3.3A を追加した。

13.7.3.0 記述の基盤の書き方は、導入句のある、パターン化されたものと利用にもわかりやすい文章化したものと、両方出してみた。

13.7.3.2 の新記録、旧記録については、イ)の吸収のところでもわかりにくいと問題になっていたので、(新記録)を(吸収した側の記録)、(旧記録)を(吸収された側の記録)と

した。他のところも同様に書き換えた。

- ・誤記誤植に関する注記が入っていない。
- ・NCR においては、現場の要望もあって、判断規定にするのを避けてきた。本来は判断規定であって、判断に基づくから任意的な要素もある。AACR2 のように、「重要な場合注記する」と変えるか、注記する部分をしぼるか考える。
- ・利用者にわかりやすい形の注記と定型注記との間でコンフリクトを起こしている場合がある。定型化しようとする意図は、簡潔、カタログの共有、コンピュータで扱う場合に他の記述データと関係づけのしやすさ。利用者のためにはわかりやすいことも重要。
- ・インプットとアウトプットのどちらを決めているのか。目録の場合、アウトプットも考えなければならないが、アウトプットはユーザによって変更することもあり得る。「記述の基盤：第2号」「第2号に基づいて記録を作成」をアウトプットするには、「第2号」だけインプットしておいても可能。いずれ決めなければならないが、とりあえずは両方並べておくことでどうか。

・並行情報については、AACR2 の索引では、parallel と multilingual の両方を見なければいけない。また、シリーズのタイトルや責任表示などのように、索引にも入っておらず、本文の条項にも規定されていないが、例示だけある場合もあるので、AACR2 第12章全体を見なくてはならない。パラレルは英語圏では当たり前なので必ずしも丁寧に書いていないが、NCR では意識して書いた方がいい。

古川委員が AACR2 2002R の第12章の改訂について、資料4をもとに説明した。

更新資料を追加して包括的になったことが大きな変化だが、改訂の度合いは強くはなく中核部分は余り変わっていない。範囲については、Hirons の考え方が、前は integrating resource を continuing resource だけ入れていたが、そうではないものがあるということに気づいて finite integrating resource も入れている。情報源については、記述の基盤を加えており、NCR に近づいた。誤記は訂正し記録することになったが、これはこの章だけ変更して NCR と同じとなった。第1章などは変わっていない。本タイトルに略語形と完全形がある場合は後者を選ぶとする点などは ISBN との一致である。

・21.2、21.30j の本タイトルの変化は、NCR では第1部にかかってくる。NCR は第1部の記述の部分が大きい規則だからだ。したがって、AACR2 の 21.2 を吟味しながら、13.0.2 を検討しなければならない。

・AACR は1章を取り込まず参照している。NCR は9章以来入れ込んでいるので、NCR を再構成する際、検討する。

・NCR は ISBD にしたがって巻次、年月次を順序表示にしたが、AACR は別々にしている。

・タイトルに含まれている責任表示は、AACR2 では繰り返さないとの趣旨の規定がある。

4. 和漢古書について

増井委員が資料について説明し、木村委員がNIIの状況について補足して説明した。

和古書についてNCRにならって規則を書いてみた(資料8)。NIIから「和漢古書に関する取扱い及び解説(最終案)」(資料9)が出た。これは、4月に案を公開して7月まで意見を収集し、それを反映させている。ただし、内容的に変更しているところはほとんどなく、解説を加えたり経緯を説明しているが、この解説部分の変更が多い。NIIでは作業を急いで進めており、年内にコーディングマニュアルの見直しを一通り終える予定。急いだのは、すでに足かけ3年に渡って作業をしており、これ以上ひっぱりたくないという事情もある。

- ・和古書と漢籍とのそれぞれのコミュニティの折り合いについては、誤解されやすい部分を削るなどしている。例えば漢籍でよく出てくる「封面」という用語を削除したが、その時意見は出なかった。これからいろいろ意見が出てくるかもしれない。

- ・目録規則とコーディングマニュアルのレベルは明確ではない。目録規則で根拠を作っておけばコーディングマニュアルで書き込む必要はない。このあたり、協力できるところではしなくてはならない。

- ・パンクチュエーションについて、以前、2.1.1.1Aの例について、酒井さんから質問されたことがあった。NCRではISBDのパンクチュエーションを1987年版で取り入れたが、意味合いが違うところもあり、もともとないところに入れたので、独自に作ってしまったところもある。どうしてそうなったかわからなかった。はっきりさせたほうがいい。

4. ISBD(ER)改訂案について

- ・第3エリアの削除は大きい。当初は意味があったが、段々意味はなくなりつつある情報だが、なくすことはできない。図書館界ではredundantだが、ダブリンコアでは資源タイプにあたり重要。コメント出すかどうか、図書館界の作っているメタデータ標準がどうなっているか参考に見てみる。意見聴取の締切は1月15日。

次回 2003年1月18日(仮) 1月開催できれば、次次回 2月22日

1月開催できない場合 2月8日